一柳満喜子の教育観

佐野安仁

一　近江兄弟社の教育事業と一柳満喜子
(一)　教育事業の概要
(二)　「大林子供の家」およびその他の事業
二　一柳満喜子の教育観形成の過程
(一)　家庭の影響
(二)　ミス・アリス・ベーコンの影響
三　キリストを模範とした教育
(一)　一柳満喜子のキリスト教信仰
(二)　自己統制力の育成　―教育の目的―
(三)　教育の方法とその特色
(四)　満喜子の役割

一　近江兄弟社の教育事業と一柳満喜子

(一)　教育事業の概要

近江兄弟社の諸事業のなかで、教育事業は一つの重要な柱となっている。その教育事業の発端は、大正九年（一九二〇）、プレイグラウンドとして出発した清友園幼稚園の設立であった。近江兄弟社の創立者、一柳米来留（*William Merrell Vories 1880—1964*）は、この清友園幼稚園の創設を「我々は以前から願っていた新しいタイプの教育事業を始めたいと思う。キリスト教教育のあるべき姿を、実際に示すことができるならば、現在の日本の教育界において問題解決の確実な貢献をなし得るであろう」[1]と語っている。明治三八年（一九〇五）、滋賀県立商業学校の英語教師として赴任するために来日し、同校を伝道活動のゆえに解雇されたメレル・ヴォーリズ（一柳米来留）にとって、まさに「新しいタイプの教育事業」は、来日以来の念願であったといえよう。

だが、この教育事業はメレル・ヴォーリズの発議によるものではなかった。これを提唱したのは、彼の妻、一柳満喜子（一八八四—一九六九）であった。メレル・ヴォーリズは、自らも思念していたことであっただけに、新しい事業の推進を最も信頼する満喜子に託した。満喜子は、大正八年（一九一九）六月、メレル・ヴォーリズと三四歳で結婚し、近江八幡で新しい生活をはじめたばかりであった。彼女は、家事に専念しつつも、時間の余裕を有効な仕事にと思念していた。その頃「軒下にポリポリおやつを食べながら何するともなくたたずんでいる子供たち」をみて、「子供たちに建設的な遊び場を造る必要を感じた」と語っている。[2]そこで大正九年、満喜子は、プレイグラウンドの仕事

を決意し、「兄弟社の空地を用い、自分の小遣や少しの持物を現金に替えてその費用に足し……遊びに来る子供たちのために、雑誌部、英語部、料理部等の活動」[3]を開始した。

この経緯を満喜子は「当時の兄弟社の実行委員会は、金銭を要する事はしないという決議でしたが、これは金銭の問題ではなくキリスト教教育をするのだという事で、神のお導きを受けて、幼稚園は出発しました」[4]とのべている。「天よりの賜物」として開始されたプレイグラウンドは、大正一一年（一九二二）八月に、正式に県の認可を受け、清友園幼稚園となり、これが兄弟社教育事業の基礎となった。

昭和八年（一九三三）、メレル・ヴォーリズと共に兄弟社の創立に尽力した吉田悦蔵の提唱によって近江勤労女学校が開設された。満喜子の幼稚園教育に対応した中等教育機関としての近江勤労女学校は、吉田悦蔵を校長とし、午前中を学課学習に当て、午後は労作による学習をする五年制のユニークな学校であった。これと平行して、昭和八年（一九三五）五月に、メンソレータム女子従業員の教養増進を目的とした教育事業が企図された。満喜子は指導者として、この事業の責任をになうことになった。これは向上学園と呼称され、当初、毎日午後、女子従業員を対象に学課学習を一時間ほど行い、土曜日は家政、洋裁、茶の湯を交互に習うことにしていた。昭和九年（一九三四）一〇月、教育課程の充実をはかり、昭和一二年（一九三七）からは全女子事務員をも含む教育機関とした。しかし、この向上学園は公認の機関ではなく、兄弟社独自の社内教育の場であった。小学校の尋常科および高等科を卒業した女子社員を勤続年数によって一組から三組まで組分けし、女学校の卒業生をもって四組とし、学級を編成した。また「当学園ハ作業時間中或ハソノ前後ヲ問ハズ、各自ノ日々直面スル生活ノ体験ノ総テヲ通ジテ生活即教育ヲ標榜ス」[5]として「生活即教育」の実践をねらいとしていた。このほか、図書の設備、食後の音楽による情操教育にも力をいれていた。

満喜子は、この向上学園において、教科としては、歴史、地理、理科を担当し、これを「彼女らに面白く勉学させるために私は掲示による教育を考え……見る能力の養成や、考える頭のよき刺戟を与えました。」[6]と従来の教科書中心の学習に新しい方法を導入しようとしていた。また、「一軒の家を借りて五人づつ一組にして二十四時間生活の実習をし、家庭礼拝、家庭団欒、食事、お弁当造り、家内の整理整頓、時間の用い方など」[7]の実習を試みていた。

近江勤労女学校は、昭和一〇年（一九三五）三月、近江兄弟社女学校と改名されたが、「労作科」による学習は継続された。吉田悦蔵の後、高橋虔、桧山嘉蔵が校長を継承し、戦後、昭和二一年（一九四六）から満喜子が校長となった。翌年四月に近江兄弟社小学校、同中学校が開設され、女学校は昭和二三年より近江兄弟社高等学校（男女共学）となった。一方、向上学園は、昭和一九年に開校された近江兄弟社女子青年学校の生徒を糾合して昭和二三年に近江兄弟社高等学校定時制部（女子の五年制）となった。当初は、向上高等学校と呼ばれていたようである。戦後の学制改革を契機に、満喜子は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、定時制部を包含する近江兄弟社学園において、学園長となり、兄弟社教育事業の全責任を負うことになった。

(二) 「大林子供の家」およびその他の事業

前述の教育事業と平行して満喜子は、昭和一一年（一九三六）一一月に「大林子供の家」を開設している。この事業は「融和地区ニ於ケル幼児児童ノ衛生保健ノ指導等ニ重点ヲオキ保育ヲナス」ことを目的とした常設の保育施設であった。事業主体は近江キリスト教慈善教化財団（のちの財団法人近江兄弟社）であったが、昭和一七年（一九四二）三月まで施設の指導責任者は満喜子であった。

この事業の経緯については「近江兄弟社社員たりし大原義雄氏の努力によって大林村民との間に長年友好関係が保たれて居たが、昭和一一年一一月一八日、時の大林村区長、柳生氏の斡旋によって同地共同浴場の二階を借り受け一柳満喜子を実地責任者として……幼児託児所（こどもの家）及少女会（自十三才至十六才の子守少女達の教化機関）を開設す」とある。[8]

「幼児託児所」は、幼児の健康増進を目的とし主として虚弱児を収容し、また「少女会」は子守少女の心身の向上を目的としたが昭和一三年八月末、経営の都合により一時中止となった。昭和一二年九月に、場所は慈恩寺町元に移転された。昭和一七年以降は、桧山嘉蔵が責任者となった。

保母は一名（徳山）、助手は二名（饗庭、松本）で、保育料は無料。副食代は三銭（一七年四月から五銭）であった。昭和一六年の在籍幼児は男二〇名、女一〇名、平均二七名の幼児が入所していた。年間の開所日数は一九八日と報告されている。[9] 厚生省、県より補金は年間六〇〇円、事業の総経費は二、一二一円（昭和一八年）であった。

この事業には大原義雄の尽力が大きかったようである。近江兄弟社は、当時、吉田悦蔵が理事長であった財団法人の力で「隣保館」[10]の新築を計画していたが実現しなかった。だが「戸数二百五拾戸、人口千三百名、貧困に依り生活は傷められている」として近江八幡の同和地区に対する積極的なかかわりを示していた。同和地区を「社会問題」と意識し、その問題の解決に「乳幼児童の保護、保健衛生の強化、体育の奨励、青少年の教化、職業の補導、相談事業、事業援助事業、授産事業」を計画した。しかし実現したのは「大林子供の家保育所」だけであった。この事業に満喜子は兄弟社の若い社員を指導して尽力し、とりわけ「幼児ヲ通して家庭の生活改善、保健衛生」の教育に従事した。（政府は昭和一一年から融和事業完成一〇カ年計画を実施していた）

満喜子が、こうした事業で痛感したことは奉仕精神に豊む「保母養成」の必要性についてであった。そこで、彼女は昭和一四年（一九三九）四月に「幼児教育専攻部」を開設し清友園幼稚園を実習所とした。これは「保母養成所」であり、労作教育を採用し、園芸家畜部と洋裁部をおいて「将来の教育事業発展のための資金を得る計画」[11]をも組みいれていた。しかし、この幼児教育専攻部は、昭和一八年（一九四三）三月をもって閉鎖された。

「大林子供の家保育所」は、戦後の近江兄弟社の事業においては発展をみなかった。満喜子が、この施設を離れた昭和一七年頃、近江兄弟社は軍閥下でさまざまな妥協を強いられていた。彼女によれば「夫、米来留は、日米戦争の心痛よりも、近江兄弟社の軍閥下の妥協やむなきに堪えず、烈しい心痛のため、ついに心臓をおかされ、七ケ月の絶対安静の養生を強いられた」とその厳しい状況を語っている。満喜子は、メレル・ヴォーリズと共に終戦を迎えるまで、兄弟社の仕事を離れ軽井沢に身を引くことになった。この時期――昭和一六年（一九四一）から昭和二〇年（一九四五）――は、二人にとって最も厳しい試練のときであった。だが、満喜子は軽井沢においても幼児教育への情熱を捨てず「寺子屋式の教育」を実践していた。

この時期を除けば、近江兄弟社の教育事業は、メレル・ヴォーリスが指摘するように、「満喜子の創意」[12]によって推進展開された。もちろん、そこには、吉田悦蔵によって開始された女子教育と、それら教育機関を戦時下も支えてきた関係者の努力と協力のあったことを看過してはならない。

ところで、清友園幼稚園がプレイグラウンドとして開始された大正九年（一九二〇）といえば、第一次世界大戦後の「教育的熱狂時代」と呼ばれたように、世界的に新教育の運動が顕著な時代であった。人間の善性を確信し、真の世界平和を教育の力で実現しようとする気運が、世界の各所にみられた。また、すでにエレン・ケイ（*Elen Key*）の『児

童の世紀』が象徴する児童中心の教育が開化しており、その世界的な教育改革の影響は、わが国にも波及していた。例えば、樋口長市の「自学教育論」とか、河野清丸の「自動教育論」とか、手塚岸衛の「自由教育論」、さらに小原国芳の「全人教育論」などが顕著なものである。またパーカースト（*Helen Parkurst*）のダルトン・プラン（*Dalton laboratory plan*）を採用した成城小学校など自由教育を標榜する私学が、多く設立されている。これらわが国における大正期の新しい教育の試みは、児童を人間として解放すること、すなわち「児童尊重」に立脚した児童の興味、自発性、自由を重視した教育展開であった。

こうした視野からみれば、満喜子による清友園幼稚園も時代の潮流のなかにあった。時代はややおくれるが満喜子は、「J・デューイの実験学校、ダルトン案の実験学校、フランシス・パーカーの学校……」[13]を昭和四年（一九二九）の北米教育視察において見学している。また、近江勤労女学校にしても、また向上学園にしても、「生活即教育」という教育方針をみる限り新教育の流れをくむものであった。だが、反面その特色は兄弟社の教育事業独自のものであったようにもみうけられる。

独自性という点に関していえば、満喜子が「神の導き」を受けて出発したという教育事業は、キリスト教に基づく教育の機関であり、またメレル・ヴォーリズが近江八幡を中心に展開した近江伝道の一環でもあったということである。つまり近江伝道という使命が前提であった。これに満喜子によって開始された教育事業が、どのような役割を果したかということである。この事業は、一般的にみて、明治初期におけるわが国のキリスト教系学校の教育と基本的には相通ずる目標をもっていた。だが、その展開の過程と方法には異なるものがあった。これは新教育の思想に影響された大正期の教育的動向にも関連をもつのであるが、満喜子は、それを自らのキリスト教信仰によって独自のとら

え方をしている。この点に、明治期とは異なった、また、新教育の思想とも異なった満喜子の教育観の独自性が認められる。この独自性は、兄弟社の教育事業の独自性ともいえよう。

では、その独自的な教育観とはどのようなものであったか。以下、満喜子の教育観形成の過程とその特質を考察してみたい。

二　一柳満喜子の教育観形成の過程

(一)　家庭の影響

満喜子の教育観形成の過程を、彼女の生いたちに即してみると大きく区分して二つの段階を認めることができる。まず、第一は、幼少期から渡米に至るまでの時期であり、第二は、九年間の在米生活の時期である。

満喜子は、父一柳末徳、母栄子の三女として明治一七年（一八八四）三月一七日に誕生。父末徳は播磨小野の領主で「帝国議会発足の時から子爵議員の一人として当選、当時の新進として政界に活躍した」[14]ようである。末徳は福沢諭吉の慶応義塾に入り、またヘボン（*J. C. Hepburn*）、フルベッキ（*G. F. Verbeck*）を囲み「他の若くて有為な人達と共に欧米の文化に就いて学んだ」と伝えられている。母、栄子は「女三従の徳」を教えられて末徳に嫁したのであるが、その家庭は「妾あり、その娘たちのいる複雑な家庭」であった。栄子は、複雑な家庭に主婦として迎えられ、「次から次へと数を増す妾」と、その子女の養育にあたらねばならなかった。栄子は、当時「ミッション・スクールの寮に入れられていた長女（妾腹の娘）」のために「菓子折を携えて寮を訪ねる」ことがあり、そうしたことからキ

リスト教にふれることになった。満喜子によれば母は「婦徳を全する理想の実現は淋しいものでありましたので……聖書を読み、キリストの敵を愛する教えに触れて百万の味方を得た心地でした」[15]と語っている。欧米文化に理解のあった末徳は妻栄子のキリスト教への関心にはこだわらなかった。栄子は明治一〇年（一八七七）一〇月、東京芝の露月教会で、グリーンより洗礼を受けた（明治二〇年、牛込教会に転入している）。栄子の入信は、華族ではじめてであった。[16]

こうした家庭において、満喜子が四歳のとき、彼女の付添役であった女性が、父の新しい妾となり、子を出産した。満喜子はその異様さに複雑なものを感じ、それ以来、父親を嫌い、父親の生活に不信を抱くと共に、母親の苦悩をみて三従の婦徳にもやがて疑問を感ずるようになった。満喜子の幼い胸に刻みつけられた「父親に対する憎悪、義憤」と、「心の苦痛に堪え、愛敵の精神に生き抜いた母の祈る姿」とは、のちに彼女の教育観を構成する重要な要因となる。

満喜子が九歳のとき――明治二六年（一八九三）――、母栄子は他界する。父親を嫌い、憎む満喜子にとって母なきあとの家庭生活は淋しいものであった。その淋しさは「母の埋められた土の中に自分も入るよりほかに逃れ道はない……」[17]と思わせるほどであった。だが、なき母親より受けた感化で、満喜子は、九歳のころより「耐えて生き抜く道」を思念しはじめたようである。やがて、それは、満喜子の「自主、自助」の精神を形成し「生涯を社会奉仕に生きようとする決意」に連動することになる。

満喜子は、明治二二年（一八八九）に幼稚園に入園、二三年から四カ年間、東京女子高等師範学校附属小学校で学び、二七年から六カ年間、同校附属女学校に在学し、さらに、三三年から二カ年間、同校の補習科で和裁を習得し

た。明治三五年（一九〇二）補習科の卒業を契機に、満喜子は父親の許しを得て、兄恵三の養子先であった大阪の広岡家にて生活することになった。父親のもとで暮すことに耐えられなかったようである。広岡家では三人の姪の家庭教師役が与えられた。このとき、満喜子は幼児の生活のなかに「自発力の偉大さ」を発見し、幼児教育に関心をもちはじめた。「何でも自分の事は自分でする自主の教育」[18]に気づき、広岡家の姪たちにそのような配慮をもって接する機会をえた。この体験が満喜子ののちの幼児教育への伏線となった。

満喜子は、明治三九年（一九〇六）神戸女学校音楽部に入学し、四一年に卒業している。その間、松方正義宅から通学していた。その後日本女子大学校で「半ば生徒、半ば教師」の生活をはじめた。このとき彼女は、はじめて二〇円の月給を得た。この頃、津田梅子にも師事し、英語を学んだようである。また、何回か縁談があった。しかし、それは、「理想の結婚」とか「純潔な生活」とか、「社会を浄化する家庭のあり方」とかを思わず口にして、すべて破談となった。こうした満喜子の存在が何かと目ざわりになった父末徳は、彼女に渡米を申し渡した。満喜子は「何んとうれしいことか、願ったり、かなったり」と明治四二年（一九〇九）に渡米することになった。二四歳のときである。

さて、前述のように、満喜子の念頭には、父親に対する不信感から「家庭生活の浄化」という課題が生じ、また、母親の「祈りによる無言の教育」から「愛敵の精神」というキリスト者の生き方が課題となっていた。加えて、三従の婦徳に反発して、女性としての「自主的な生き方」に、また「自発力を発揮」する幼児の教育にも関心をもっていた。こうした課題、関心事が、彼女の教育観を形成する基盤となり、それが在米生活において次第に明確なものとなる。

(二) ミス・アリス・ベーコンの影響

二四歳で渡米することになった満喜子は、当時、どこで、何を学ぶかを定めていなかった。偶然、渡航中同船していたアメリカ人夫妻と出合い、「もし私たちを信用なさるなら……東部の一流の大学に案内したいが……」という親切な夫妻の申し出に、満喜子は心を打たれ、決心して万事を夫妻に依頼した。このアメリカ人夫妻がどのような人であったかは明確でない。満喜子は、後にこの出合いを「神の深い愛」として、また「見えざるみ手の働き」として述懐している。(19)

彼女が紹介された学校はブリンマー女子大学の予備校であった。ブリンマー女子大学は一八八五年、ペンシルヴェニア州、フィラデルフィアの郊外に、クェーカー派の人たちによって創設された。津田梅子、河井道、星野愛などわが国女子教育の先駆者が学んだ大学であり、「個人の無限の向上」「自己犠牲的奉仕の精神」をもって学風としていた。満喜子は、この学風のなかで、予備校に三カ年間在籍し、所定のコースで英語、幾何、代数、歴史、フランス語、ラテン語などを修学した。その間一九一〇年(明治四三年)一二月、渡米の翌年、ブリンモア、プレスビテリアン教会でジョンストン・ドス牧師より洗礼をうけた。

満喜子の入信の決意は、何よりも予備校時代の寮生活を通してのことであったといえよう。その寮生活において、満喜子は、脳性小児麻痺の学生や視覚障害をもつ学生を友人とし、また、その日常の世話をすることになった。彼女は、身体障害者と共に生活する中で「彼等が人間性の渇望を強く持ち、長所をのばして欠陥を補う工夫と努力」に懸命であることをみ、「人間の可能性は限りなく伸展する事」を学んだ。これは、のちに満喜子が身障者教育にも意欲

を示す礎石になるが、身体障害者に対するアメリカ人の「人道的」というか、「クリスチャン的態度」というべきか、そうした態度に啓発され、キリスト教への入信を決意したものとみられる。こうした態度を満喜子は、彼女の指導者であったミス・アリス・ベーコン（*Miss Alice M. Bacon*）によって学んだ。ミス・ベーコンは、満喜子を信頼し、仕事を与え、「慈母の如き愛情」をもって指導した。満喜子はミス・ベーコンの信頼と愛情の温かさに、また、神のもとにすべての人間を平等に尊重する態度に、キリスト教をみたのである。[20]

予備校を修了した満喜子は、奨学金をうけて大学に入学したが、腸チフスにかかり半年近くを病床で過ごした。入院中、彼女はアメリカにおける看護法の行きとどいた完全さと、看護婦の地位の高さに驚き、病人看護の問題にも啓発された。退院後、大学にもどったのであるが、満喜子は、聞くだけの学習に何か物足りなさを感じていた。こうした折、彼女は、「恩師ミス・アリス・ベーコンの所望を入れて大学をやめ、同師の事業を援け、夏冬その膝下に学びつつ、その家庭生活の仕事を分担することになった」。[21] のである。ミス・ベーコンは、エール大学の神学部教授、レオナルド・ベーコン（*Leonard Bacon*）の娘で、[22] 満喜子によれば「偉大な頭脳と精神」の持ち主であり、「強い民主的信念」の保持者であった。満喜子は「ミス・ベーコンの影といわれる自分の存在に無上の喜びと楽しみをもち、生れてはじめて愛に浸る恵みを感じた」と述懐している。

私費で留学した満喜子は、その頃、家族からの送金を絶たれて、自助、自活を強いられていただけに、ミス・ベーコンの家庭での生活は天父の恵みであったといえよう。ミス・ベーコンは毎夏、あらゆる階層、人種が一つになるキャンプを企画し、生活を共にすることで「人間尊重」とか「平等」とか「平和で民主的な社会の形成」とかの問題を語り合い、実践することを学ぶことにしていた。満喜子は、このキャンプ生活を援け、アルバイトの黒人の教師や労

働者と共に台所仕事をしたり、参加者の世話役を引きうけていた。こうした体験から「人間社会における労働の意義」「自由にして規律ある生活」「人間の平等性」「民主的な社会形成」などの問題を身をもって学びとった。彼女は、これらを「終生忘れられない貴重な体験であった」と語っている。

さて満喜子は、九年間の在米生活において、いくつかの問題に解決の方向をさぐりえた。その一つは、父親がもたらした家庭生活の不和に対して、どのように生活を浄化するかという問題であった。これに関しては、まず、女性が「三従の婦徳」に生きるのではなく、ミス・ベーコンのように、またアメリカの母親のように「威厳」をもつこと。そのために女性は自己を変革し、男女が平等に尊重される社会形成に目を開くこと。それには、新しい家庭教育や女子教育が必要であり、また、早期に人間変革を試みる幼児教育が必要であるという方向をみいだした。

第二は、母親より受けた「愛敵の精神」による生き方の問題であった。これに関しては、ミス・ベーコンの厚い信頼と深い慈愛にふれ、母なきあとの孤独感から解放されたこと。また、ミス・ベーコンの威厳、奉仕、信頼、愛がキリスト教の信仰に発露するものであることを感得したこと。さらに、キリスト教の神のもとに、広く人種、階級、男女の差を越えてすべての人間が、平等に尊重されること。とりわけ身障者に対する「人道的」な接し方に、また、その奉仕の精神に具体的なキリスト教の信仰をみたこと。これらのことから、キリスト中心の生き方を決意し、その生活からそれに伴うキリスト中心の教育という新しい課題をさぐりえた。

これに関連して満喜子が改めて気づいた問題は、健康に関してである。日頃、健康に自信のなかった彼女は、ミス・ベーコンとの生活において、身体が人格によって働くという認識をえた。だが、身体の健康なくしては、愛と奉仕の精神も生きた働きに力を欠く。在米中の入院生活で啓発された看護教育への関心は、この点で一層重要なものと

して確認された。

このような体験から、満喜子の念頭には、新しく、キリストを中心とした家庭教育、幼児教育、そしてまた、人間の無限の可能性を確信した身障者教育、愛と奉仕の精神に基づく慈善事業への思いが描かれはじめた。

三　キリストを模範とした教育

大正七年(一九一八)に「父上老衰につき帰国せよ」との知らせをうけ、「親は二人とない、ぜひ帰国しなさい」とのミス・ベーコンのすすめによって、満喜子は九年間の在米生活に区切りをつけた。このとき満喜子にはまだ、父親に対する不信感があった。これが彼女のキリスト教信仰とどのようにかかわるかについては後述する。大正八年（一九一九）周囲の反対もあったが、満喜子は広岡浅子（兄の義母）の理解と援けによりメレル・ヴォーリズと三四歳で結婚、以来、近江八幡に居を定め、前述の諸事業に着手することになる。すでにのべたように、満喜子は、無為に過ごす近所の子どもたちをみかね、在米中に得た奉仕の精神からプレイグラウンドを開始し、清友園幼稚園を正式に開園した。満喜子は、そのとき訓練された保母の必要性を感じ、協力者のなかから浪川かつ子（中村かつ子）を保母の専門教育を受けさせるために渡米させた。また自らも「教育学上の裏書がなくては信頼を受けられない事を思って…」[233]昭和四年（一九二八）、幼児教育研究のために再度渡米した。在米中浪川かつ子と共に視察した教育機関は「ニューヨークの *National Child Health Association* や *National Heigine Association* をはじめとして、ワシントンの *Child Research Center* やイェールのギゼル博士の教育実験所……また *Lincoln School* や *Horacemon School*（ジ

ョンデューイ博士の教育法の実験学校）……」[24]であった。

その間「コロンビア大学学芸学部の夏期大学にも席を置いて受講し……*Perkins Institute* に盲人教育の実際を見、黒人教育の殿堂といわれている *Hampton Institute* …… デトロイトにある *Nursery School* の *Merrill Parmer School*」をも視察した。[25]

これらの視察見学の機関をみるとき、満喜子の教育上の関心を知ることができる。その一つは「ジョン・デューイの実験学校、ダルトン案の実験学校、フラシンス・パーカーの学校」の見学に示される児童中心の教育方法に対する関心である。児童の「自発性、自主性の発揮」は、満喜子の教育観において一貫して強調されており、それをいかにして育成するかに関心があった。第二は「盲人教育」の機関視察に示される身障者教育に対する関心であった。第三は、「黒人教育」の機関の視察に示される人間平等に対する関心であった。第四は、看護教育の機関視察に示される身体の健康、衛生についての関心であった。これらの関心は前述の九年間の在米生活において得た問題意識と連動している。

この視察において、満喜子が気づいたことは、「私の頭に与えられている教育理念から宗教を除いたもの」が行われているということであった。つまり「キリストが身をもって示された教育思想及び方法」は、検出できなかった。満喜子の念頭にはミス・ベーコンとの生活を通じて「キリストの〝真理を追求し、これを実践せよ〟との命令」が刻みつけられていた。だが、その命令に即した教育の実際をみることはできなかった。

(一) 一柳満喜子のキリスト教信仰

満喜子のキリスト教信仰は、前述のように幼少期に母親の「愛敵の精神」よりうけた感化にはじまり、ミス・ベー

コンのキリスト教信仰に基づく「威厳、信頼、慈愛」と「奉仕の精神」にふれ、さらに「神中心の生活」を主唱して近江兄弟社を設立したメレル・ヴォーリズと結婚し、彼の事業に参画する過程で結実をみた。この過程において満喜子が、集中して熟読したのは聖書の四福音書であった。彼女は、福音書において「天父への絶対服従、天父の愛への絶対信頼、弟子たちへの限りない忍耐、パリサイ人に対する寛容と忍耐、真理の樹立」[26]を学び「キリストご自身絶えずこの訓練を身に受けておられた」として「キリストの訓練」を重視し、その訓練に生きる「神中心の生活」を強調している。

満喜子が、「キリストの訓練」を重視したのは、キリストを模範とする「自己統制力」を問題としたからである。彼女は、「自己統制力」のない父親が家庭の不和、不幸の原因であったことを意識し、父親を許すことができなかった。また、自己統制力のない「父親の淫らな血」が自分の中にも流れているとして、その浄化に「自己統制力」を痛感した。「私の血はあなた（創造主）の血のように清らかではありません」[27]として満喜子は、すべての生命の源である全知全能なる創造主に、浄化を求め、その浄化の生き方をキリストに学び、キリストを生活の模範とした。彼女の信仰の特質は「キリストを模範とすること」、したがって、「天父への絶対服従」にあった。この厳しさには、キリストが流した十字架上の血、人間の罪の許し、犠牲と愛が自覚されねばならない。満喜子の信仰には、この「愛による許し」と「許せない父親」とが葛藤していた。この点、彼女の信仰は、限定された「キリスト論」に基づき、キリスト教の倫理、規律面に強いかかわりを示している。したがって、キリストを生活の基準とする「自己統制力」が強調され、「自己中心的な態度」は「家庭や社会を不和に陥し入れる」として、人間を「自己中心」から「神中心」の生活へと解放すること、そのためにキリストに従って生きることを自らの生活の指針とした。

(二) 自己統制力の育成——教育の目的——

さて、こうしたキリスト教信仰から、満喜子は、「キリストによって生れ、育くまれてきた兄弟社内こそキリストに絶対従順の教育を試みる場所である」[28]として自らの教育観を実践することになった。

その教育観の中核は、満喜子の信仰の内実そのものに連動している。彼女は、まず「四福音には教育の基準が、永遠に朽ちない形に保存されている」[29]とし、四福音書に伝えられてきたキリストを模範として「真の教育の目標、方針、方法」を確立しようとした。つまり「天父の全きがごとく汝等も全かれ」と、その全きを仰いで人類の教育の目的とした。この目標をもって満喜子は、「キリストを模範する教育」[30]を提唱し、その具体化として「自己統制力」の育成を教育課題とした。この課題には、「天父の全き」を仰いで「正しく見る能力、正しく聴く能力、正しく考える能力」の育成が必要となる。これらの能力の育成は、各個性に「世渡りの秘訣」と「健全な処世術」を体得させることになり、「自己中心」から、「神中心」への転換を期するものとみた。

ところで、満喜子が課題とした「自己統制力」の概念には、多くの人間的資質が複合している。第一に、自己統制力の育成は「真の自由人」の育成でもある。この自由人には、「神に直通する霊の働き」が要請される。「霊の働き」には、神に服する従順と共に、神に直通する自主、自発が必要である。この自主、自発は、「神の真理」を樹立する創造性に連動する。満喜子は、このように、自己統制力は霊の働きにより、そこから真の自由、自主、創造性が育成されるとしている。この着想は当時の児童中心の教育における自由、自主、創造性とは同一でない。

第二に、自己統制力の育成は「知識を自己のためだけではなく社会のために用いる人間」、つまり自己中心的でない

人間の育成でもあった。これは、神に直結する霊の働きに基づいて、正しく思考し、正しく観察し、正しく聴取することで得た知識を、自発的に社会生活に役立てることを意味する。満喜子は、その知識に基づく生活を、愛、寛容、平等、奉仕の生活であると指摘している。つまり自己統制力の育成は、健全な知性および心性の育成をも包括する。

第三に、自己統制力の育成は「節制による健康な人間」の育成を目指す。身体は、前述の霊、知によって働くのであって、健康な身体が重視される。健康には、節制、身体の生理に基づく合理的生活が要請される。

満喜子にとって、自己統制力とは、「霊、智、体」の三つの総合を意味した。[31] つまり、「健康な精神生活」、「健康な智的生活」、「健康な生理生活」をもって「人格耐震建築」[32]の要素とし、この要素による自己統制力の育成を企図した。

そこで、満喜子は、教育の領域を次のように三区分した。第一は、「健康な生理生活」の領域である。この領域においては、栄養、消化、新陳代謝、運動、休養の意味を理解させ、合理的な生理生活の学習をする。第二は、「健康な智能生活」の領域である。この領域においては、読書、聴講（正しく聞くこと）、観察（正しく見ること）、経験、思考（正しく考えること）を訓練するとともに、その生活を学習させる。とくに自発的に疑問を質す態度、積極的に聞く態度の育成を重視する。第三は、「健康な精神生活」の領域である。この領域においては、愛、寛容、信頼、平等、奉仕、祈りの意味を理解させ、その生活を学習する。

満喜子は、この三領域の調和をもって「天父の全きが如く汝等も全かれ」を志向し、その実践にキリストを模範とした。こうした教育を、まず幼児の自己中心的な状態にできるだけ早く導入し、幼児に「自己統制力」を体得させようと試みた。

(三) 教育の方法とその特色

さて、前述の教育領域において、何を教材とするかという問題であるが、満喜子は、一方において教材は四福音書にあるといい、他方において、「実社会に直面する経験」をもって教材とすると規定している。[33] 満喜子は、教科書中心の注入式教育には反発していた。だが彼女の念頭には四福音書があった。そして、そこに教材を求めた。このことと、「実社会に直面する経験」を教材とするという発想とはどのような関連で結びつくのか。実社会に直面する経験」を教材とする発想は、活動単元、問題単元を想起させるもので、北米における教育視察の際に受けた影響とみられる。事実、満喜子は、「生活から学ぶ」こと、「なすことで学ぶ」ことを強調した。

満喜子によれば、幼児には幼児の生活があり、成人には成人の生活がある。その現実的な生活にこそ、また、そこで直面する経験にこそ自己統制の訓練の場があり、生きた教材があるとみた。そうして問題に直面するとき、「正しく見る能力、正しく聴く能力、正しく考える能力」を必要とする。[34] この「正しさ」の基準は四福音書にあった。したがって、問題に直面したとき、神の正しさに基づいて考えを深め、生活の方向を見出すことが要請される。これは、「神の正しさ」によって自己統制力を練磨することであって、そこに自主的な真の自己教育が成りたつ。「実社会に直面する経験」は、正しく見る、聴く、考えることの契機となり、そこから「正しさ」に向けて自己統制を学ぶ生きた教育がうまれる。

こうした満喜子の教材観は、問題的状況において、それを解決する「創造的知性」を育成しようとしたJ・デューイの問題単元にみる教材観とは異なる。満喜子はJ・デューイの教育方法に関心をもっていたが、彼女は前述のよう

に四福音書を不動で確実な教材とし、それを日常生活の中で学び、習得することを強調している。それは所謂「問題解決学習」ではなく、むしろ恒久的真理によって方向づけられた道の学習を意味した。こうした観点は、ペレニアリズム（*Perennialism*）に近い。

また、当時の新教育運動において強調されていた児童の自発性、自由、創造性などの概念についても、満喜子のとらえ方は、「キリスト」との関連で言及されている。キリストの生活を模範とする自己統制力によってこそ、自由があり、また、創造主の「創造力や自由」を見習うことで、それを自らのものとし、その見習う姿勢に自発性が指摘される。こうした観点は、まず、「キリスト」を全面におしだすことで教化的になりやすく、「児童中心主義」による自由、創造性の育成の方法とは異なってくる。

ところで、自己統制力は、どのような段階を経て育成されるか。満喜子は、次のような見解を示している。自己統制力の育成には、まず「幼児にできるだけ早く集団的環境を与えること」である。集団生活における「共通の遊び道具、共通の室、共通の時間と共通動作」において、我ままを抑える「自治」の練習が、自己統制力の出発点である。[35] そこから次第に生活の環境を拡げ、人と人との関係、人と物との関係において、「キリストを最高の手本」とした自己統制力を練習する。そのために「共通の室での遊び相手」との生活から「もっと広く幼稚園全体」という環境を自覚させ、さらに、「国とか、他の国とかの話をだんだんして、少しずつ大きい人類世界の観念」[36]をもたせることが必要であるとみている。自然科学の学習にしても、身近かな生活環境の観察から、それを拡大する方向で観察の視野を広め、事物を見る目を養うことが肝要だとしている。

こうした満喜子の見解には、「興味中心」の方法が考慮されているようにみられるが、彼女の教育方法は、徹底し

た興味中心の概念で展開されてはいない。その概念の使用は漠然としている。全般をみて、満喜子には教育方法に関する専門的言及が欠けている。それは、満喜子が、既成の教育学を嫌って、独自の教育を志向していたことによるものであるが、そのために、かえって彼女の方法論は不備なものとなっている。

(四) 満喜子の役割

満喜子は、何よりも独自の教育を志向した。だが、彼女は、それを自らの手で完成しようとは考えていなかった。満喜子の役割は、まず自らの教育観、あるいはビジョンを語り、説くことであった。そうして、その教育実践と教育学的裏づけは、彼女に協力する教師の創意に期待した。近江兄弟社の教育事業を新しい教育の実験の場とし、そこに結集する教師に新しい教育の実践とその方法の確立を期待した。そのために、教師の意欲を刺戟し、積極的な教育実践を奨励した。

この役割は、満喜子にとって教師の養成を意味するものであった。この教師養成という点では、何よりも教師の「自己統制力」を問題にし、教師の生活のあり方に厳しかった。また、教師のみならず、幼児、児童の親に対しても、親を家庭での教師とみて厳しく指導することを自らの役割としていた。

こうした満喜子の役割、指導性において、彼女が最も待望したのは、新しい教育への教師の創意であった。理念に対する方法論、理論的構成に弱さのあった満喜子は、その面の指導性に十分な役割を果しえなかった。彼女は、その弱点の克服を教師に期待しつつ、同時に自らも教師集団と共に克服しようと努力した。その努力は清友園幼稚園の創

設から晩年に至るまで一貫していた。

だが、キリストを模範とした自己統制力の育成を目標として展開した教育を、満喜子は晩年「神から預けられた大切な教育事業を果し得なかった……神のおゆるしを願うのみです」[37]と自らを顧み、兄弟社が「神の国のデモンストレーションとしての大切な役割をもつことを忘れないでください」とその課題を残して、昭和四四年（一九六九）九月七日、八五歳で生涯を終えた。

（注）

（1）THE OMI MUSTARD SEED（近江マスタードシード誌第一七巻第二号、大正一二年五月号）。

（2）一柳満喜子著『教育随想』（近江兄弟社学園、昭和四一年、一一ページ。

（3）同書、一一～一二ページ。

（4）同書、一二ページ。

（5）学園五〇周年記念文集委員会編『教育のこころみ』（近江兄弟社学園、昭和四七年）、二〇三ページ。

（6）一柳満喜子著『教育随想』、一一三～一一四ページ。

（7）この実習は「二十四時訓練」として長く実践されていた。

（8）「大林こどもの家」財団法人近江兄弟社本部所蔵。

（9）「大林子供の家保育所」―事業報告書昭和十九年―財団法人近江兄弟社本部所蔵。

（10）「隣保館新築事由」、財団法人近江兄弟社本部所蔵。

（11）『教育のこころみ』、一九〇ページ。

（12）一柳米来留著『失敗者の自叙伝』（近江兄弟社湖声社、昭和四五年）、二七七ページ。

（13）一柳満喜子著『教育随想』、一九ページ。

（14）同右書、一ページ。

（15）同右書、二ページ。

（16）一柳米来留著『失敗者の自叙伝』、二八六ページ。

（17）一柳満喜子著『教育随想』、三ページ。

（18）同右書、一〇八ページ。

（19）同右書、六ページ。

（20）予備校在学中のことは『教育随想』に記述されている。また入信の経緯については野村耕三著『日本人の終末観』

（新教出版社）の二八四ページに言及されている。

(21) 『教育随想』、七ページ。

(22) 『失敗者の自叙伝』二七五ページ。

(23) (24) (25) 『教育随想』、一四ページ。

(26) 同右書、二〇ページ。

(27) G, N. Fletcher: Love is the Bridge, (Hodder and Stoughton LTD, 1968) p.41.

(28) 『教育随想』、二〇ページ。

(29) 同右書、八八ページ。

(30) 同右書、九七―一〇〇ページ。

(31) 同右書、九九ページ。これをもって「全人教育」とも称していた。

(32) 同右書、七四ページ。満喜子がメレル・ヴォーリズの建築設計に関連して、しばしば用いた概念である。

(33) 同右書、七三ページ。

(34) 同右書、二〇ページ、六五ページ、一一六ページ。満喜子が最も使用した用語である。

(35) 同右書、二九ページ。

(36) 同右書、三〇ページ。

(37) 『教育のこころみ』、一七四ページ。

（拙稿は、近江兄弟社の浦谷道三氏、奥村直彦氏より貴重な助言をいただいてまとめたものである。厚く謝意を表したい。）